

『平家物語』（梶原正昭、山下宏明校注、岩波文庫）

※（註…）及び赤太字は筆者

巻第八 緒環

（略）

豊後国は、刑部卿三位頼資卿の国なりけり。子息頼経朝臣を代官におかれ
たり。京より頼経のもとへ、「平家は神明にもはなたれたてまつり、君にも捨
られまゐらせて、帝都を出で、浪のうへにたゞよふ落人となれり。しかるを
鎮西の者どもがうけとつてもてなすなるこそ奇怪なれ。当国においては、し
たがふべからず。一味同心して追出すべき」よし、の給ひつかはされたりけ
れば、頼経朝臣、是を当国の住人**緒方二郎維義**（註…これよし＝惟栄）に下知
す。

彼維義は、おそろしきものの末なりけり。たとへば豊後国の片山里に、昔
をんなありけり。或人のひとりむすめ、夫もなかりけるがもとへ、母にもし
らせず、男よなよなかよふ程に、とし月もかさなる程に、身もたゞならずな
りぬ。母是をあやしむで、「汝がもとへかよふ者は何者ぞ」ととへば、「くる
をば見れども、帰るをば知らず」とぞ言ひける。「さらば、男の帰らむとき、
しるしを付て、ゆかむ方をつないで見よ」とおしへければ、むすめ、母のを
しへにしたがって、朝帰りする男の、水色の狩衣を着たりけるに、狩衣の頸
かみに針をさし、しずのをだまきといふものをつけて、へてゆくかたをつな
いでゆけば、豊後国にとつても日向さかひ、うばだけ（註…姥嶽、今の祖母

山)といふ嵩のすそ、大なる岩屋のうちへぞつなぎ入れたる。をんな、岩屋のくちにたゞずんで聞けば、おほきなるこゑしてによびけり。「わらはこそ是まで尋参りたれ、見参せむ」と言ひければ、「我は是、人のすがたにはあらず。汝すがたを見ては、肝たましひも身にそふまじきなり。とうとう帰れ。汝がはらめる子は男子なるべし。弓矢・打物とッては、九州・二島にならぶ者もあるまじきぞ」とぞ言ひける。女重ねて申けるは、「たとひいかなるすがたにもあれ、此日来のよしみ、何とてかわするべき。互にすがたをも見もし、見えむ」と言はれて、「さらば」とて岩屋の内より、臥だけは五六尺、跡枕へは十四五丈もあるらむとおぼゆる大蛇にて、動揺してこそはひ出たれ。狩衣のくびかみにさすとおもひつる針は、すなはち大蛇ののぶえにこそさいたりけれ。女是を見て、肝たましひも身にそはず。ひき具したりける所従十余人、たふれふためき、をめきさけむでにげさりぬ。女帰って程なく産をしたれば、男子にてぞありける。母方の祖父太大夫、そだててみむとてそだてたれば、いまだ十歳にもみたざるに、せいおほきにかほながく、たけたかゝりけり。七歳にて元服せさせ、母方の祖父を太大夫と言ふ間、是を大太とこそつけたりけれ。夏も冬も手足におほきなるあかぐりひまなくわれければ、あかがり大太とぞ言はれける。件の大蛇は、日向国にあがめられ給へる高知尾の明神の神体也。此**緒方の三郎**は、あかがり大太には、五代の孫なり。かゝるおそろしき物の末なりければ、国司の仰を院宣と号して、九州・二島にめぐらしぶみをしければ、しかるべき兵ども、**維義**に随ひつく。

同 太宰府落

平家、いまは宮こを定め、内裏つくるべきよし沙汰ありしに、**維義**が謀反と聞えしかば、いかにとさわがれけり。平大納言時忠卿申されけるは、「彼維義は、小松殿の御家人なり。小松殿の君達一所にむかはせ給ひて、こしらへて御らんぜらるべうや候らん」と申されければ、「まことにも」とて、小松の新三位中将資盛卿、五百余騎で、豊後国にうち越えて、やうやうにこしらへ給へども、**維義**したがひたてまつらず。あまツさへ、とりこめまゐらせずは、なに程の事かわたらせ給ふべき。とうとう太宰府へ帰らせ給ひて、たゞ御一所でいかにもならせ給へ」とて、追歸し奉る。**維義**が次男**野尻の二郎維村**(註..)これむらゝ惟村)を使者で、太宰府へ申けるは、「平家は重恩の君にてましませば、甲をぬぎ、弓をはづいて参るべう候へども、一院の御定に、速に九国を追出しまゐらせよと候。急ぎ出させ給ふべうや候らん」と申おくツたりければ、平大納言時忠卿、ひおぐゝりの直垂に糸くずの袴、立烏帽子で、**維村**に出でむかッての給ひけるは、「それ我君は、天孫四十九世の正統、仁王八十一代の御門なり。天照大神・正八幡宮も我君をこそまもりまゐらツさせ給ふらめ。就中に故太政大臣入道殿は、保元・平治両度の逆乱をしづめ、其上鎮西の者どもをば、うち様へこそ召されしか。当国・北国の凶徒等が、頼朝・義仲等にかたらはれて、「しおほせたらば国をあづけう、庄をたばん」と言ふをまこととおもひて、其鼻豊後が下知にしたがはん事、しかるべからず」と

その給ける。豊後の国司刑部卿三位頼資卿は、きはめて鼻の大におはしければ、かうはの給ひけり。維村帰ッて父に此よし言ひければ、「こはいかに、昔はむかし、今は今。其義ならば速かに追出したてまつれ」とて、勢そろふるなど聞えしかば、平家の侍、源大夫判官季定、摂津判官守澄、「向後傍輩のため寄怪に候。召しとり候はん」とて、其勢三千余騎で、筑後国高野本庄に発向して、一日一夜攻め戦ふ。されども維義が勢、雲霞のごとくにかさなりければ、ちから及ばでひきしりぞく。

平家は緒方三郎維義が三万余騎の勢にて、既によすと聞えしかば、とる物もとりあへず太宰府をこそ落ち給へ。さしもたのもしかりつる天満天神のしめのほとりを、心ぼそくもたちはなれ、駕輿丁もなければ、葱花・宝輦はたゞ名のみ聞きて、主上要輿に召されけり。国母をはじめ奉て、やんごとなき女房達、袴のそばをとり、大臣殿以下の卿相・雲客、指貫のそばをはさみ、水きの戸を出て、かちはだしにて我さきに前にと、箱崎の津へこそ落給へ。をりふしくだる雨、車軸のごとし。吹風、砂をあぐとかや。落つる涙、ふる雨、わきていづれも見えざりけり。住吉・筥崎・香椎・宗像ふしをがみ、たゞ主上旧都の還幸とのみぞ祈られける。たるみ山・鶉浜などいふ峨々たる嶮難をしのぎ、渺々たる平沙へぞおもむき給ふ。いつならはしの御事なれば、御足より出づる血は沙をそめ、紅の袴は色をまし、白袴はすそ紅にぞなりにける。彼玄装三蔵の流沙葱嶺を凌がれけんくるしみも、是にはいかでまさるべき。されどもそれは求法のためなれば、自他の利益もありけん。是は怨敵の

ゆゑなれば、後世のくるしみかつおもふこそかなしけれ。

原田大夫種直は、二千余騎で平家の御とともに参る。山鹿兵藤次、秀遠、数千騎で平家の御むかひに参りけるが、種直・秀遠以外（もつてのほか）に不和になりければ、種直は、あしかりなんとて道より引ツかへす。芦屋の津といふところを過ぎさせ給ふにも、「これは我が宮こより福原へかよひしとき、里の名なれば」とて、いづれの里よりもなつかしう、今さらあはれをぞもよほされける。新羅・百濟・高麗・荊旦、雲のはて、海のはてまでも落ゆかばやとはおぼしけれども、浪風むかうてかなはねば、兵藤次秀遠に具せられて、山賀の城にぞこもり給ふ。山賀へも敵やすと聞えしかば、小舟どもに召して、夜もすがら豊前国柳が浦へぞわたり給ふ。こゝに内裏つくるべきよし沙汰ありしかども、分限なかりければつくられず。又長門より源氏やすと聞えしかば、海士小舟にとりのりて、海にぞうかび給ひける。小松殿の三男左の中將清経は、もとより何事もおもひ入れたる人なれば、「宮こをば源氏がために攻め落され、鎮西をば**維義**がために追出さる。網にかゝれる魚のごとし。いづくへゆかまのがるべきかは。ながらへはつべき身にもあらず」とて、月の夜、心をすまし、舟の屋形に立ち出でて、横笛ねとり朗詠してあそばせけるが、閑に経よみ念仏して、海にぞしづみ給ひける。男女なきかなしめども甲斐ぞなき。

(略)